

1 歴史的仮名遣い

古文では現代語と表記の方法に違いがある。古文で使われる表記法を歴史的仮名遣いと呼ぶ。

(1) 語頭以外の「ハ行」→「ワ行」

かは(川) ↓かわ 思ひ出↓思い出 買ふ↓買う
いへ(家) ↓いえ ほのほ(炎) ↓ほのお

(2) 「ゐ」「ゑ」「を」「ワ行」→「い」「え」「お」

まゐる(参る) ↓まいる すゑ(末) ↓すえ
をかし↓おかし

(3) 母音が重なる場合→長音となる

au ↓ ou まうす(申す) mau su ↓もうす mousu
かうし(格子) kausi ↓こうし kousi
iu ↓ yuu しうと(舅) siuto ↓しゅうと syuto
いうげん(幽玄) iugen ↓ゆうげん yuugen
eu ↓ you てうど(調度) teudo ↓ちようど youto
えうなし(要なし) eunasi ↓ようなし yonasi

(4) 「くわ」「ぐわ」「ぢ」「づ」↓「か」「が」「じ」「ず」

くわじ(火事) ↓かじ ぐわんもん(願文) ↓がんもん
はぢ(恥) ↓はじ よろづ(万) ↓よろず

(5) その他

古文では促音(「っ」と拗音(「ゃ、ゅ、ょ」)は小さい仮名では書かれない。
しや|か(釈迦) ↓し|やか はし|つて(走つて) ↓走|つて

〈練習問題①〉

問 次の古語を現代仮名遣いになおしてみよう。

- | | | |
|------------|---------|------------|
| ① いさかひ | ② 向かひ合ふ | ③ いへゐ(家居) |
| ④ こゑ | ⑤ あふぎ | ⑥ けふそく(脇息) |
| ⑦ くらうど(蔵人) | ⑧ くわてう | ⑨ いうなり |
| ⑩ 鳥のゐるやうに | | |

○五十音図

ア行	イ段	エ段	オ段
あ	い	え	お
カ行	キ段	ケ段	コ段
か	き	け	こ
サ行	シ段	セ段	ソ段
さ	し	せ	そ
タ行	チ段	テ段	ト段
た	ち	て	と
ナ行	ニ段	ネ段	ノ段
な	に	ね	の
ハ行	ヒ段	ヘ段	ホ段
は	ひ	へ	ほ
マ行	ミ段	メ段	モ段
ま	み	め	も
ヤ行	ユ段	ヨ段	
や	い	え	を
ラ行	リ段		
ら	り		
ワ行	ワ段		
わ	ゐ		

カタカナ

○いろは歌

いろはにほへど
ちりぬるを
わかよたれそ
つねならむ
うゐのおくやま
けふこえて
あさきゆめみし
ゑひもせす

色は匂へど
散りぬるを
我が世誰そ
常ならむ
有為の奥山
今日越えて
浅き夢見し
酔ひもせず

! 助動詞・助詞の中の「む」

「ン」と発音する
見む……………見ン
泣きけむ…………泣きけん
花なむ咲く…………花なン咲く
※助動詞「しむ」は「シム」と発音

解答

- | | |
|--------|-----------|
| ① いさかい | ② 向かい合う |
| ③ いえい | ④ こえ |
| ⑤ おうぎ | ⑥ きょうそく |
| ⑦ くらうど | ⑧ かちよう |
| ⑨ ゆうなり | ⑩ 鳥のいるように |

LEVEL 1

あらすじを把握するために必要不可欠な項目

古文の学習において、一番最初にしなければならないのは、文章の大意をつかむ（あらすじを把握すること）である。その文章がどんな内容なのか、その物語には誰が登場し、どんなことが起こり、どうなったかということ把握することである。そのためには次のことが分かなければならない。（白抜きの数字は対応する章の番号。）

① 一文の構造が分かる。(0・1)

主語・目的語・補語↓格助詞(2)

述語↓用言(3)

② 打消の語が分かる。(4)

「ず」「じ」「まじ」↓助動詞

「なし」↓形容詞

「で」↓接続助詞

③ 反語表現が分かる。

「や（は）」「か（は）」↓係助詞(5)

「あに」「なんぞ」「いかで」など↓副詞(6)

④ 文と文の関係が分かる。

「ば」「て」「ども」など↓接続助詞(7)

①は全てにおいて必要な最も基本的なものである。特に古文は一文がとも長かったり、主語が省略されることも多いので、文の構造をしつかりと見極められなければならない。

②・③は全ての文に出てくるわけではないが、見落としてはいけないものである。表現されている内容が反対になるので、これを見落とすと、あらすじを把握する際に間違ってしまうことになる。

④はあらずじを把握する際に大きなヒントとなる。文章とは主―述の関係を持ったものがいくつも連続していくものである。あらすじを把握するためにはこの一つの主―述と次の主―述がどのような関係で結ばれているのかを考えなければならない。

1

日本語の文法において「目的語」や「補語」といった言い方はしないが、本書では説明の便宜上、これらの用語を使う。

一般的な文法書ではこれらを「用言」に対する「修飾語」という説明をしている。「を」や「に」といった要素は「用言」を補足説明するものであるが「修飾語―被修飾語」という分類は、範囲が広すぎて、文の構造を説明するには適当ではないと判断した。

例えば、「白き雲」や「とく往なむ」も「修飾語―被修飾語」である。これらの修飾語と区別するため、助詞がついて（省略されることもある）述語の補足説明をする（対象や起点などを表す）ものを「目的語」「補語」と呼ぶ。このうち、格助詞「を」がついて対象を表すものを「目的語」とし、それ以外の格助詞がつくものを「補語」と呼ぶこととする。

0 文の特徴

まずは次の文を見てみよう。

私 彼 彼女 紹介する。

この文では、紹介する主体が三人（私、彼、彼女）のうち誰なのかも分らないし、主体以外の残りの二人がどのような関係なのかも分らない。「紹介する」という言葉から、残りの二人が紹介する対象（を）と紹介される対象（へ）を示すということは分かるが、三人を特定することができない。つまり、日本語というのは、語順によって主体や対象を示すというのではないということである。

では、次のように語を補ってみよう。

私は 彼に 彼女を 紹介する。

私を 彼は 彼女に 紹介する。

私に 彼を 彼女は 紹介する。

それぞれの語句の下に「は」「に」「を」という語を入れることによって主体や、対象が明確になる。これらの文における語の役割を明確にする語を「格助詞」という。つまり、**日本語は語順によって文の意味が決まるのではなく、「格助詞」によって文意が決まるのである。**

これらの要素のうち、「は」がついているものを「主語」と呼び、その主語が行う動作を示したり、状態を示した語（ここでは「紹介する」）を「述語」と呼ぶ。また、「に」がついているものを「補語」と、「を」がついているものを「目的語」と呼ぶことにする。

語順で言えば、主語、補語、目的語はどの順序で書かれても文として成立するが、一般にこれらの要素は**述語の前に置かれる**。言い換えると、「格助詞」は述語の前に置かれるということになる。

また、格助詞は省略されることがある。特に主語を表す格助詞は省略されることが多い。補語や目的語を示す格助詞も省略されることがあるが、それは述語から判断するとよい。

本□ 買う。

といった場合、「買う」という言葉から補うべき言葉（を）を推測できる。このように「述語」を補足するためにはどんな要素が必要かを考えればよい。

1 一般的な文においては「主語」「補語」「目的語」は「述語」の前に置かれるが、「述語」の後に「主語」や「補語」「目的語」が置かれると、「倒置」と呼ぶ。

1 例えば、「を」という助詞は「格助詞」と「接続助詞」の二種類がある。これらを区別するのは、述語の前か後かで、考えるとよい。「格助詞」は「述語」の前に置かれるのが普通であり、一方「接続助詞」は文と文を繋ぐ役割を持つものだから、一つの文の後、つまり、述語の後に置かれる。

1 文の構造

(1) 主語・述語

日本語において最も重要なのは「**主語**」と「**述語**」である。これは「何がする」「何がである」というように、あるモノの動きや様子を表す文の最も基本的な形である。

男^{主語} ありけり^{述語}。

笑ふこと^{主語} 限りなし^{述語}。

寺のさまも^{主語} あはれなり^{述語}。

・主語 「何（誰）」が「にあたる部分」。

主に体言（名詞）が主語になる。

格助詞「の」「が」、係助詞「は」「も」がつくが、何もつかないことも多い。

また、主語は省略されることが多い。

紫だちたる雲の^{主語} 細くたなびきたる。

犬君が^{主語} 逃がしつる。

小さきものは^{主語}、みなうつくし。

忠明も^{主語} 太刀を抜きて、

・述語 主語の動作・状態・作用を表す。「どうする」「どんなだ」「何だ」にあたる部分。

主に用言（動詞・形容詞・形容動詞）が述語になる。

(2) 目的語・補語

次に重要なのが「**目的語**」や「**補語**」である。これらは「述語」の対象を示したり、意味を補ったりするものである。「くを」「くに」「くと」などの言葉がつく。これらの「目的語」や「補語」は日本語では通常、「述語」の前に置かれる。

京童部ども、谷を^{目的語} 見下ろして、

小式部内侍、局に^{目的語} ありけるに、

大家 減びて、小家と^{補語} なる。

関白殿、黒戸より^{補語} 出でさせたまふ。

○文節

文節は文の構造を考えるための言葉のまとまりのことである。その言葉のまとまりが文の中でどのような役割を持っているかを考えるための一区切りである。その役割ごとに「主語」「述語」「目的語」「補語」「修飾語」「被修飾語」「接続語」「独立語」などがある。

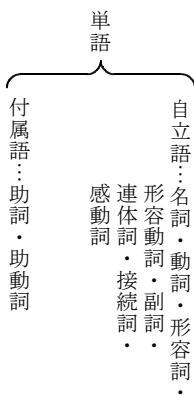
基本的には

文節＝自立語（＋付属語）

という形になる。

○単語

単語は言葉の最小の単位。この区切り方は、その言葉がどのような特徴を持っているかを考えるためのものである。単語にはその特徴によって、名詞・動詞・形容詞・形容動詞・副詞・連体詞・接続詞・感動詞・助詞・助動詞の十種類に分類される。そのうち、助動詞と助詞を付属語と言いい、それ以外の八つを自立語と言



!

特に名詞を**体言**と呼び、動詞・形容詞・形容動詞をまとめて**用言**と呼ぶ。

〈練習問題②〉

問 次の文章の主語・述語・目的語・補語を指摘してみよう。

- ① 盗人、あやしと思ふ。
- ② 盗人これを見る。
- ③ この春より、思ひ嘆きはべるなり。
- ④ 春の日に雪仏を作り、
- ⑤ 和泉式部、保昌が妻にて、丹後に下りけるほどに、

(3) 修飾語・被修飾語

前にある文節の意味が、後の文節の意味を限定することを言う。この場合、前の文節を修飾語、後ろの文節を被修飾語と言う。
修飾語になるのは形容詞、形容動詞、副詞、連体詞などがある。

よろづの 被修飾語 修飾語 こと

赤き 被修飾語 修飾語 花

(4) 接続語

前後の文や文節を接続する文節。前後の文や文節の関係性を示す。

雨降りぬべし。 接続語 されど、行かむ。

(7) 独立語

感嘆・呼びかけなどを表し、独立して用いられる。他の文節との関係性は弱い。

いざ 独立語 行かん。

(8) 単文・重文・複文

・単文…主語と述語の関係が一つしかないもの。

花 主語 咲く。 述語

・重文…主語と述語の関係が二回以上あり、並立するもの。

花 主語 咲き、 主語 風 主語 香る。 述語

解答

- ① 盗人、あやしと思ふ。
主語 盗人、 補語 あやし 述語 思ふ。
- ② 盗人これを見る。
主語 盗人 目的語 これ 述語 見る。
- ③ この春より、思ひ嘆きはべるなり。
補語 この春より、 述語 思ひ嘆きはべるなり。
- ④ 春の日に雪仏を作り、
補語 春の日に 目的語 雪仏 述語 作り、
- ⑤ 和泉式部、保昌が妻にて、丹後に下りけるほどに、
主語 和泉式部、 補語 保昌が妻にて、 補語 丹後に 述語 下りけるほどに、

○被修飾語

修飾される文節を被修飾語と呼ぶが、多くの場合、主語・述語・目的語・補語が被修飾語となる。

・複文：主語と述語の関係が二回以上あり、それが並立の関係でないもの。

●主語の中に主述の関係を含むもの

主語 + 述語
主語 + 述語
主語 + 述語

主語	花など	咲く	も	をかし。	述語
----	-----	----	---	------	----

●目的語や補語の中に主述の関係を含むもの。

主語 + 目的語・補語 + 述語
主語 + 目的語・補語 + 述語
主語 + 目的語・補語 + 述語

主語	かぐや姫、	月の	おもしろういでたる	を	見て	述語
----	-------	----	-----------	---	----	----

●述語の中に主述の関係を含むもの。

主語 + 述語
主語 + 述語
主語 + 述語

主語	僧たち、	笑ふこと	限りなし。	述語
----	------	------	-------	----

※同格

主語や目的語、補語が長くなるとき、格助詞「の」「が」が使われる。これは同格の「の」「が」と言われ、その直前と直後が同じ人（物）に対する説明となる。

主語

述語

連歌しける法師の、	行願寺のほとりにありける	が	聞きて、
-----------	--------------	---	------

連歌しける
+「の」
行願寺のほとりにありける
法師が聞きて、

2 格助詞

体言や体言に準ずる語などについて文節を作り、その文節が文中でどのような関係（主語・目的語・補語）にあるかを示す助詞を格助詞と言う。

(1) 主語であることを表す（主格）

●「の」「が」

雪^主の^格 いと高う降りたるを、

雀^主の子を 犬君^主が^格 逃がししる。

※「は」（係助詞）…題目・主題の呈示、他と区別して取り立てる

春^主は^格 あけぼの。

※「も」（係助詞）…並列、同趣のものの一つを呈示

潮満ちぬ。風^主も^格 吹きぬべし。

心^主なしと見ゆる者^主も^格、よき一言言ふものなり。

(2) 目的語であることを表す

●「を」

京童部^主どもと いさか^目ひ^的を^格 しけり。

(3) 補語であることを表す

●「に」

場所、動作の対象、目的、変化の結果、原因などを表す。
小式部内侍、局^主に^格 ありけるに、

●「へ」

動作の方向を表す。
船に乗るべき所^主へ^格 渡る。

●「と」

動作の相手、変化の結果、引用などを表す。
僧たち、宵のつれづれに、「いざ、かいもちひせむ」と、言ひけるを、

●「より」

起点、経過点、比較の基準などを表す。
解由など取りて、住む館^主より^格 出でて、

●「にて」

場所、手段、原因などを表す。
ある所^主にて^格 夜更くるまで連歌して、

○助詞

助詞は付属語で活用がないもの。文の中のその語の役割を示したり、文と文を繋ぐ働きをしたり、文働きの加える意味にある意味を加える働きをする。

その働きによって「格助詞」「接続助詞」「係助詞」「副助詞」「終助詞」「間頭助詞」がある。

○格助詞「の」「が」

主格
連体修飾格
同格
ノ
デ

● 「して」 手段、共同者、使役の対象などを表す。

もとより友とする人、一人二人して 行きけり。

● 「から」 起点、経過点、原因、手段などを表す。

その遣戸から 顔をさし出で給へ。

〈練習問題③〉

問 次の文章の主語・述語・目的語・補語を指摘してみよう。

今は昔、比叡の山に児ありけり。僧たち、宵のつれづれに、「いぎ、かいもちひせむ。」と言ひけるを、この児、心よせに聞きけり。

解答

今は昔、比叡の山に児ありけり。

僧たち、宵のつれづれに、「いぎ、かいもちひせむ。」と言ひけるを、この児、心寄せに聞きけり。

また、「僧たち、宵のつれづれに、『いぎ、かいもちひせむ。』と言ひけるを」が、「聞きけり」(述語)の目的語になっている。

3 用言

自立語で活用があるものを用言と言う。用言には動詞・形容詞・形容動詞がある。**用言は述語になることが多い。**

咲く＋ず ↓ 咲か
 咲く＋て ↓ 咲き
 咲く＋。 ↓ 咲く。
 咲く＋とき ↓ 咲くとき
 咲く＋ども ↓ 咲くども
 咲く＋(命令) ↓ 咲け。

(1) 活用形

用言や助動詞が活用するときの形を六つに分け、未然形・連用形・終止形・連体形・已然形・命令形と呼ぶ。

未然形…「ず」や「む」といったその動作がまだ成立していないことを表す語が続く場合の形。

連用形…用言に連なる形。

終止形…文を言い切るとき形の形。

連体形…体言に連なる形。

已然形…「ば」「ども」「ど」などの語を伴って、已に動作が完了していることを表すときの形。

命令形…命令する場合に使われる形。

(2) 活用表

活用語の活用形を表にまとめたもの。

咲	語幹
か	未然形
き	連用形
く	終止形
く	連体形
け	已然形
け	命令形

活用語尾

(3) 動詞

用言のうち、動作・作用・存在を表し、単独で述語になることができるものを動詞と言う。多くは言い切りの形がウ段である。

動詞はその活用の仕方によって、九つに分類される。

正格活用	四段活用 上二段活用 下二段活用 上一段活用 下一段活用
変格活用	カ行変格活用 サ行変格活用 ナ行変格活用 ラ行変格活用

○活用

下に続く言葉によって語形が変わることを**活用**と呼ぶ。活用する語には用言と助動詞がある。

○語幹と活用語尾

活用語が活用するとき、変化しない部分を**語幹**と言い、形が変わる部分を**活用語尾**と呼ぶ。

語幹 咲
活用語尾 く

ラ行変格活用	ナ行変格活用	サ行変格活用	カ行変格活用	下一段活用	上一段活用	下二段活用	上二段活用	四段活用	
ら	な	せ	こ	e	i	e	i	a	未然形
り	に	し	き	e	i	e	i	i	連用形
り	ぬ	す	く	eる	いる	u	u	u	終止形
る	ぬる	する	くる	eる	いる	うる	うる	u	連体形
れ	ぬれ	すれ	くれ	eれ	いれ	うれ	うれ	e	已然形
れ	ね	せよ	こよ こ	eよ	iよ	eよ	iよ	e	命令形

ひ
い
き
に
み
ゐ
＋
る

「あり」「をり」「はべり」「いまそかり」の四語

●四段活用・上二段活用・下二段活用の識別

「ず」を続けて未然形を作る。

←
ア段…四段活用
イ段…上二段活用
エ段…下二段活用

例 咲く＋ず↓咲かず

= ア段…四段活用

起く＋ず↓起きず

= イ段…上二段活用

捨つ＋ず↓捨てず

= エ段…下二段活用

(4) 形容詞

用言のうち、事物の性質や状態、人の感情などを表し、単独で述語になることができるものを形容詞と言う。終止形が「し」で終わる。形容詞には二つの活用がある。

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ク活用	く	く	し	き	けれ	○
	から	かり	○	かる	○	かれ
シク活用	しく	しく	し	しき	しけれ	○
	しから	しかり	○	しかる	○	しかれ

○「ク活用」と「シク活用」の区別

この二つの活用は終止形以外全て違うので、「し」があるか、ないかによって判断すればよい。
終止形から判断しなければならない場合は下に「なる」を続けて、連用形を作るとよい。

良し＋なる↓良くなる 〓 ク活用

美し＋なる↓美しくなる 〓 シク活用

！ 上記の方法は最初から使うのではなく、文章中の他のヒントと合わせて使うことが望ましい。

例えば、「て」の前は連用形であるということを知っていれば、上記の方法を使わなくても判断できることもある。

内へ逃げて

「て」の前は連用形なので、「逃げ」は連用形である。連用形で「エ段」なのだから、下二段か下一段である。下一段は「蹴る」「語しくないのだから」、「逃げ」はガ行下二段活用であるということが分かる。

刀を抜きて

この場合は、逆に「エ段」ではないので、四段か上二段ということになる。ここで「ず」を続けて考えるのだが、確かめるのは、

抜かず
抜きず

の二通りである。連用形がイ段なのだから下二段は除外される。「抜かず」が正しいと分かる。よって、「抜か」は「カ行四段活用の連用形」であると判断できる。

！ 「シク活用」の活用表は「ク活用」の活用表の終止形以外に全て「し」を加えればできる。

！ 形容詞の活用表の左側は、助動詞を接続するために作られたものである。形容詞の連用形「く」に動詞「あり」を続けたものである。

く＋あり↓かり

このため、形容詞の活用表の左側は「ラ変型」で活用すると言われる。

○「多し」の活用

多	未然	連用	終止	連帯	已然	命令
から	く	く	し	き	けれ	○
かり			かり			
かる				かる		
かれ					けれ	
かれ					○	

(5) 形容動詞

用言のうち、事物の性質や状態を表し、単独で述語になることができるものを形容動詞と言う。終止形が「～なり」「～たり」で終わる。形容動詞には二つの活用がある。

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ナリ活用	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
タリ活用	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

〈練習問題④〉

問1 次の文章の傍線部の動詞の活用の種類と活用形を答えてみよう。

その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。翁言ふやう、「わが朝ごと夕ごと見る竹の中におはするにて知りぬ。子になりたまふべき人なめり。」とて、手にうち入れて家へ持ちて来ぬ。

問2 次の文章の形容詞・形容動詞を指摘し、活用の種類と活用形を答えてみよう。

花は盛りに、月は限なきをのみ見るものかは。雨に向かひて月を恋ひ、垂れ込めて春の行方知らぬも、なほあはれに情け深し。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見どころ多けれ。

形容動詞の活用はラ変型である。

解答

問一

- ①ラ行変格活用・連用形
- ②マ行上一段活用・已然形
- ③ワ行上一段活用・連用形
- ④サ行変格活用・連体形
- ⑤ラ行四段活用・連用形
- ⑥ラ行下二段活用・連用形
- ⑦カ行変格活用・連用形

問二

限なき↓ク活用・連体形
あはれに↓ナリ活用・連用形
情け深し↓シク活用・終止形
多けれ↓ク活用・已然形